

# 豊山 千蔭（とよやま・ちかげ）

## 1、プロフィール

風を聞き、樹木の囁きを聴いた俳人である。視力の薄れてゆく時も、視力零の境涯でも詠い続けたのは、現代詩の思想にくいこんだ現代俳句であり、心が掴んだ詩である。

<生没>

1914(大正3)年3月19日 ~ 2003(平成15)年12月22日

<代表作>

句集『結氷音』『蟹の鋏』『唐辛子の真赤』

<青森との関わり>

福岡県生まれ。昭和21年父祖の地八戸に帰り、林業で地域貢献。現代俳句を県内に啓蒙した。

## 2、作家解説

英子夫人の父島守静翠居に俳句の手ほどきを受ける。静翠居は在京中新しい俳句を学び、旧態の八戸俳諧に於いては異色の俳人であった。その後八戸赤十字病院副院長伊藤麦子に学ぶ等、出発の時から新風を身につけて育っていった。加藤楸邨の俳句に出会った時、そこに自分の進むべき道を見いだしたのは当然のことだった。

早くから病の為に視力が薄れてゆき、持ち山の天狗沢に庵を構えて療養に当たった。その山の生活が、風や樹、肌に触れるものを心に響かせる、大地に根を張った千蔭俳句を形成したものと思われる。

「炉煤舞ふ馬売る話進まぬに」は「寒雷」(加藤楸邨主宰)の巻頭を飾った中の一句であるが、楸邨が激賞した句である。八戸の風土俳句を根底とした作品とも見えるが、この頃より同門の金子兜太との知己を得、その作風はより現代的、詩的に変貌していった。当時八戸俳壇では村上しゅらと双璧を成し、共に県内を吟

行し、角川俳句賞にも挑戦しようとしたが、師楸邨は千蔭俳句は角川俳句賞句にあらず、句集をもって世に問うようにと勧め「縄縷ひて夜の耳白む結氷音」の句を軸に、句集『結氷音』を出版、これが認められて現代俳句協会賞を獲得した。

自らの研鑽と共に岳父島森静翠居句集『こがらし』、師伊藤麦子句集『花蓼』、友人窪田月章遺句集『鞆』等を出版、それぞれの俳恩に報いた。

第二句集『蟹の缺』には「蟹の缺が硝子を擦って満月なり」があり、他の追従を許さない独自の境地に到達していた。第三句集『唐辛子の真赤』出版の頃は大分視力が衰えて、それも又人生と肯い自分の俳句を作り続け、間もなく視力零。豊山千蔭点字句集は、同じ光りを失った人への呼び掛けで、金子兜太が鑑賞文を書き朗読をし、点字句集『風化の観音』が成った。失明の千蔭は風と樹と対話し、魚の水にひるがえる音と話し、四圍のものを心眼でとらえて、独自の俳三昧に生涯をかけた。

### 3、資料紹介

#### ○『結氷音』

図書

1966(昭和 41)年8月 10 日

185mm × 135mm

第一句集。句作を始めてから昭和 40 年までの俳句を加藤楸邨の選句により 323 句収録。表題は「縄縷ひて夜の耳白む結氷音」から採ったもの。衰えゆく視力回復のため入院手術を行うが、心の眼によって捉えた世界は澄み渡る。第 14 回現代俳句協会賞受賞。